

# 北陸道親不知の天嶮開通成る

溪水 渡邊 丈 貳

裏日本唯一の樞要幹線たる舊北陸道即ち國道十一號線中新潟縣西頸城郡青海町より市振村に至る、蜿蜒十五料の間は、日本「アルプス」の峻嶮なる連山が日本海に突入して北陸の交通を閉塞して居つた。強いて交通せんとすれば、親不知の天嶮、子不知の難所、駒返しの荒波等危険困難を伴ふ海岸線を通行するの外途なき處であつた。

明治十六年工費七萬圓を投して、峻嶮なる親不知海岸山腹に幅三米位の道路が切辟かれたるも、數年ならずして、所々に山崩れは起る。橋梁は腐朽する等荒廢名狀し難く、隨つて人馬不通となつてしまつたが、世の進運に伴ひ産業開發上及軍事上の見地から本國道の重要性を認められ、遂に昭和八年度から改良工事を施すこととなつた。同十年度

迄は、短年度事業で道路延長八料二十四米を實施せるも富山縣下の新川郡境村に至る十六料五十七米四二に對する半分に過ぎざるを以て、昭和十一年度以降からは、三ヶ年の繼續事業となつて、工事施工中、時局の影響で一ヶ年延長して、本年度を以てこの繼續事業も終了するのである。

起工以來七星霜を閲し、工費亦總額百三萬五千圓を要したのである。

當所計畫は西頸城郡青海町西端を起點として、海岸山腹の舊道を縫ふて同郡歌外渡村を経て、親不知天嶮上に達し夫れより同郡市振村を越えて、市振驛前迄總延長十四料三百四十四米四二を施工するのであつたが、工事中不慮の災害を生じ、豫算内にては全工事の竣功困難となつて已むな

既定延長より千三百七十五米を短縮して工事を一先づ竣功せしむることになった。この短縮せられた分は、追加工事として昭和十五年度に實施することになつてゐる。

一就ては叙上の親不知國道改良工事が幅七米の坦々たる大道となつて略ぼ竣功して、僅かに市振村淨土地籍に於て約一軒半ばかりの間が最近迄工事の都合で少しも手を着けてなかつたが、従務員の努力に依つて、昭和十四年十月十五日、秋晴れのこの佳日に於て、天地開闢以來閉塞されて居つた北陸道が、神代の天の岩戸を手力男命に依つて開かれた如く、ボカンと、幅七米の大道が切畔かれたので、恰も食道癪が取除かれたるが如く明朗且つ颯爽と自動車が矢の如く走ることが出来る様になつた。

これみな御稜威のしからしむる所にして、國民の擧つて感謝し、併せて國力の増進を謳歌することが出来るのであつて誠に難有次第である。

時恰も日本道路技術協會關西支部の御歴々四十五名よりなる北陸道路路調査の一行が、福井、金澤、富山の各道路

都市街を調査して當親不知國道開通直後の中秋十月十六日有意義なる通行初めを華々しく致され道路史上一頁を飾ることになつた。

入りよく天地に和し岩を切り

道を開きてあなかしこあな

叙上の如く、往昔より交通困難の所であつたので交通上封鎖孤立の状態にあつた。沿線の部落に聖代文明の風を通し、明朗化すると共に物資の運輸上多大の便益を得せしめ産業開發上將又軍事上裨益すること甚大なるのみならず、沿線亦風光明媚の觀光道路として、旅人遊客の旅情を慰むるに充分なるものがある。又交通運輸の所であつた關係上世に知られざる史蹟名勝が澤山あるが其内最も著名なるものを摘んで、村人の傳説や史實を、拙筆を以て取纏め項を逐ふて紹介することとする。これが旅人遊客の案内役を務むることになれば幸甚である。

親不知國道沿線の史蹟名勝と産業

一、舊北陸道の旅

- 二、親不知の嶮の由來
- 三、明治大帝御巡幸道路
- 四、親鸞聖人の法話、大雲寺の縁起
- 五、芭蕉の句碑並原始林
- 六、勝山城趾
- 七、如砥如矢
- 八、山姥の洞
- 九、福來口と越冬の岩燕
- 一〇、特産眞柏に就いて
- 一一、青海町と電氣化學工業

### 一、舊北陸道の旅

北陸道は孝徳天皇大化二年（一、三〇六）政治的に區劃された我國八道（畿内、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道）の一人で日本海に面し、南は東山道、西は山陰道に接し、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡の七國を含んで居つたので、即ち上古の古志道と呼ぶ地方で、今は福井、石川、富山、新潟の四縣になつて居る。

後世交通線として呼ばれた北陸（街）道は、京師から佐渡

國府に至る間を指し（奈良、平安時代）、關所は、奈良時代には、愛發（福井縣敦賀郡愛發村）、平安時代には、安宅（石川縣能美郡安宅町）、江戸時代には、市振（新潟縣西頸城郡市振村）に關が置かれ、延喜式（延長五年、一、五八七）には、佐渡、京都間の行程を、上り三十四日、下り十七日、海路四十九日と公定されて居つた。街道中には、黒部川の四十八瀬、親不知の嶮等があつて、旅行は極めて困難を感じたものであつたが、奈良、平安朝時代東北地方との交通は、この線によるもの多く、足利時代には、如來信仰の旺盛に伴ひ善光寺參詣者の往復が頻繁であつた。また武家時代には、東國を連絡する第二次線として、軍事上重要視され、従つて屢々沿道に合戦が行はれ幾多の史蹟を残してゐる。

### 二、親不知の嶮の由來

親不知の嶮は、往昔寒原の嶮と名けられた所で、寄せ來る波のために親も子も互に顧る暇がないと言ふ所から、仄かに親不知の異名を附してゐたのであるが、それに加へて

中古の頃親不知の名を一般強化した深い因縁がある。

源平の兵事に依り、地ノ大納言頼盛が、平家没落の單り頼朝の厚遇を受け官職領地共に舊に復したるも、或る人其の門に接して、仇家に依倚して苟も身命を全ふするを譏る。

頼盛深く之れを愧し、文治元年剃髮して名を重運と改め、暫く世を憚り、越の國三島郡の内中之島五百疋に身を隠す事となつた。今も其所に宮を建て、大納言の像を安置してあると云ふ。

都に残る御臺の方、夫の行衛を慕ひ、二歳の男子を懷に抱いて、越路を遙々都を後に北陸道を下り、日を重ね、月を積んで、寒原の難所に差懸つた。時恰も、龍女の眠醒めたるや、白浪碧空に注ぎ、黒雲滄海に垂れ、洋々たる百灘天地を分たさる程に大時化に遭遇し、怒濤逆巻き岸壁を嘯むの有様を見て、頼るべなき身の辿り道、今更如何ともする能はず、又寄せ來る波の引く間に、岩又岩の散亂せる其中を涙と共に通り過ぎんとせし時、胸に抱ける形見の男兒を波の藻屑とさらはれて行衛も知れなくなつてしまつた。

夫人はハツト驚き、天を仰ぎ地に伏して泣き悲んだ。誰あつて知る人もなく、餘りの悲しさに堪えかねて、

親しらず子はこの浦の波枕

越路の磯花泡と消えゆく

と涙と共に一首の歌を詠んだ。是以來此處を一層強く親不知と云ひ傳へられるに至つた。

### 三、明治大帝北陸御巡幸道路

明治大帝北陸御巡幸に際して、青海町より大澤を通り、板ヶ峰を辟き歌村へ越える山道、更に歌外波字外波西端市振村境の風波より登り、天嶮上を経て淨土地域今の若水隧道上にある登降口迄の山道蜿蜒約四里の間を幅壹間程に切辟きて、御通し申上げたのが御巡幸道路として、今尙ほ其面影を存してゐる。

明治十一年九月二十八日午前九時に榮光千古に輝く御行幸を仰ぎ、同町富岡磯平氏邸に三十分間の御小休を遊ばされ、これより御粗末な板輿に召しかへされ、今の停車場の所から寺町へ出で大澤から板ヶ峰へと新道路へ向はせられ

給うたのである。この御巡幸道路は、もう年々秋草に埋れるばかりであるが、當時北陸御巡幸中に於ても、最も困難な道であつたそうである。

青海町御小休所の外に御巡幸の御途中に於て板ヶ峰と歌地内向谷及午後に至り、親不知天嶮上部に於て御展望遊ばされ、外波の伊藤幸次郎氏邸に於て御晝餐遊ばされたので、玉座及御野立の地は、大御魂が相當時間嘉しておとまり遊された聖地なのであるから、文部省の聖蹟保存會に依つて、夫々御聖蹟碑が建てられ又一部は建つべく準備が進められつゝある。

#### 四、親鸞聖人の法話、大雲寺の緣起

土御門院の御宇、承元元年彌生中旬の頃、親鸞聖人、南都北嶺の怨みを受けて、悲義の讒奏に依りて越後の國府に流罪の宣旨を蒙り、華路を出て、越後路に赴き給ふ時、聖人此の親不知の難所にかゝらせ給へば、大波、小波岸邊に打寄せ師弟三人行きつ戻りつ立悩み、大穴と呼ぶ岩窟へ入つて暫く波のをさまるを待たせらる。御伴の西佛房は、「吾

が聖人には都に在しては龜鶴鳳龍の玉簾を卷き揚げ、雪を吉野の櫻と詠じ給ふ御身が、如何に衆生齊度の爲なればとて、かゝる難所に御苦勞遊ばし、御衣の裾の潮に濡るゝさへおいたはしや」と申し上ぐれば、聖人は後を見かへり、

「西佛よ西佛この善信が一つの息絶えならば双林の地獄の貴貧暈水火の波の底を越え行くよりは、まだく輕き浮世の旅、氣づかふには及ばない。南無阿彌陀佛く」

と稱名諸共に大穴を出て、歩ませられた。

こゝへ一人の黒人、來つて道の案内を申し上げた。聖人は「そなたは何處の方にて渡らせ給ふか、我等は都のものにて念佛御繁昌が罪となり、國府の方へ落ち行くもの、先ほどからこの難所にさしかゝつたが行く先も知らず迷つてゐる。たゞ頼みにするは、そなたの情けのみである」と申さると、黒人は答へて、

「私はこの先の外波の里に住む立標と申すもので、貴僧がこゝへ渡らせ給ふを知つて御迎へに參つたものです」

といつて、この親不知の難所を首尾よく御送り申し上げ

ると往方も知れず立ち消えてしまつた。師第三人は不思議の思ひをなして道を進み、程なく外波の里に入られ、こゝやかしこと宿を求められたが誰あつて宿をかす情をもつ者がなかつた。最後に大文字屋事、右近大夫平宗輝といふこの村の庄司神官の家の前に至り、庭の大石に腰を下して西佛房をして、宿を乞はせられた。右近大夫夫婦は立ち出で、聖人の尊顔を拜すれば、温容温麗の御相にて御眼より光明を放つて在す。これだ、人ではない必ず神人權化の方で御座しますと直ぐに御宿を貸し奉り丁重にもてなした。師第三人は深くよるこびて、終夜超世の悲願、易行の大道の御法を説かせられ、話は親不知のたち。すく。み。と呼ぶ化人のことに及んだ。

右近大夫は思ひあたることのある如く、  
「私の妻左野女は眞言宗の生れで拙家へ嫁ぐ時、父にこうしてその家傳來の聖徳太子御鑄造の黄金佛を持參し内佛に安置して朝夕御給仕申し上げて居るが、神道の諱を以て立慥の如來と稱して居る。若しやこの如來が……」と不審の思

をしながら、内佛の扉を開けば、ふしぎや光明赫變として輝き御裾は潮に濡れ御足には砂がつき而も下段へ下りさせられてお在す。太夫夫婦はこの奇瑞を見て聖人の御教化の程が骨髓に徹し、即座に剃髮して御弟子となり法名を宗雲と賜つた。

翌朝御立ちの時右近夫婦は名残り惜むから、竹布に十字の尊號を染め、

「汝我等を懐しく思はゞ彌陀の尊號を稱へよ。罪惡生死の凡夫を助けたまふ御佛は彌陀一佛より外はない」

と懇ろに諭して之を授けられた。夫婦は涙に咽び斯かる殊勝の御法を今まで聞かなかつたことを悔ひ、今聖人の化尊によつて信じさせて頂いたことを喜び踊躍歡喜のうちに之を頂戴した。これより立慥の如來と十字の尊號を子々孫々に傳へて崇敬し奉つた。

外波大雲寺 親不知の驛から西へ十町ばかり行くと外波（歌外波村大字外波）につく、こゝに飛龍山大雲寺といふ大谷派の寺院がある。この寺は宗雲、即ち俗姓大文字屋

右近大夫平宗輝を開祖とし、今もなほ立慄の阿彌陀以來と十字の尊號とを寺の寶物として、毎年八月十六日より一週間特別開帳をすることになつてゐる。

### 五、芭蕉の句碑竝原始林

一つ家に遊女も寝たり萩と月

元祿六年の秋、親不知の難所を越えて、市振の關に至り枯梗やなる宿屋に泊つた時、偶然にも伊勢神宮に參詣せんと祈願ある新瀉の遊女二人と泊り合せた。

芭蕉、濁世から逸脱して俳人となり、葉も芽ふかず、花も咲かざる枯木の如き己と、性慾といふ怪しい情想の浮世に齎らした醜恥の記念物として、虐げに傷つき、泥沼に喘ぐ惡の華遊女との對照の妙に、加へ皓々たる月明に萩の花咲き亂れ、秋物の哀れを誘ふ閑寂境を詠じたので、劇的な一場面を聯想せしむる句である。

之れが句碑は、市振村長圓寺境内に在り。

尚ほ同寺裏山二町歩に互り、椿、櫻、山毛櫨等の原始林存在し、春は椿の花、秋は紅葉を以て名あり。

### 六、勝山城址

上杉謙信公越後春日山に居城し、信の國松本より大町を経て越後糸魚川に通ずる松本街道より、甲斐武田勢の侵入を遠望監視せしむる爲め、天文の半頃城壘を築きたる處にして、西頸城郡青海町西端海濱に聳え、高三百二十八米あり。新國道はその麓の山腹を切辟きて通してゐる。頂上に至れば三百坪程の平坦地の城址あり。今はその南端に壇を造り小祠を建て、ある。東方は松本街道を一眼下に、南は附近黒姫、明星等の山又山を越え遠く白馬連山を遠望し、西北に懸けて何時も清らかなる洋々たる日本海湖の神秘があり、其の先に紫雲纓韃として浮べるが如く能登半島を遠見し、展望絶佳にして、霜臺公ならずとも、この浩然たる境地に立つ時は、自ら詩情を引くことである。

謙信公北陸平定の爲め駒を進めこの山にありて前衛隊の戦捷の報を聽きたるを以て勝山と名け、且又恰も中秋九月十三日月皓々たる夜影に眺み遠征將士の颯爽たる姿を偲び

霜滿軍營秋氣清

數行過雁月三更

越山併得能州影 莫遮家郷憶遠征

と作賦して、大に歡喜せし處なりとぞ。

霜臺公の記念日、九月十三日月華をおひて勝山に登り

英雄を偲ぶ

霜滿つと君が詠ひし城址に

すゝき揺ら起て雁鳴き渡る

### 七、如砥 如矢

北陸道筋親不知の峻嶮に於て交通を閉塞せられ、強いて交通せんとすれば危険と困難とを伴ひ不便不勤ものありたるため、越後、越中、加賀の三國より寄附金を募集し、その總額七萬圓を投じて、峻嶮なる親不知海岸山腹に切辟かれたる道路が明治十六年竣功したる爲め、當時の新潟縣令永山盛輝氏が開通記念として、大道坦々如砥、人馬疾事如矢の意味を親不知天嶮上斷崖面に彫刻せしめられたるものが今なほ嚴然として保存せられてゐる。

### 八、山姥の洞

入皇六十六代一條院の正曆元年正月二十五日勅命に依り

て、源賴光、丹波、丹後の境なる、大江山鬼窟の主人公即ち煩惱に溺れ罪惡の相に擒はれた。酒顯童子を誅した時、所謂賴光の四天王のうち最年少者は、いふまでもない坂田公時で、一般には、彼は足柄山の山奥に、山姥の手に育つたと信ぜられてゐるが、山姥の棲家は、實は越後國西頸城郡上路村であると言ひ傳へてゐる。

山姥の洞は、市振驛より約二里、山中の小村上路村より更に一里山奥に在り、洞窟内は、高八尺、幅七尺、奥行二間位あり、石地藏尊數體を安置して、今尙歴然として保存せられてある。岩窟の傍らに當時公時の遊戯場たりしと云ふ百疊敷の稱ある平坦の岩盤露出せるあり。附近に公時「ブランコ」藤、坂田峠等其他の遺跡ありて、謡曲家屢々此處に探詣して、羽織袴の禮裝を以て、盤上に山姥の謡を舞曲して、一日の行樂に興すると云ふ。

序に是處を棲家とせる山姥なるものは人か、神か、鬼か謡曲山姥の筋書の一部を摘記して、世人の判斷に委すこととする。



都に名高き百萬山姥（山姥の舞を唄ふが故に其名あり）といへる白拍子、信濃國善光寺に參らんと祈願あり。從者を伴ひて、北陸より赴きけるが、あげる越えといふ山路にかゝりて俄に日暮れ、前後を忘する所に一人の女性現はれ、一夜の宿を參らせんとて、その山家に導き、さて、御身は都に隠れなき百萬山姥にてまします。その山姥の唄の一ふし我に聽かせ給へ、眞の山姥が妄執を晴らす爲めにと、さらばとて、謡はんとせしに、とてもさらば、今宵の月に謡ひ給へ、我も亦眞の山姥の姿を現して見せ申さんとて消え失せしが、夜に入りて眞の山姥の姿を現し、人界種々の相を曲舞にして説きかなでつゝ、或は謡ひ或は舞ひ、果ては山廻りの苦しさ、樂しさなど述べたる後、あゝ御名残り惜しや、春は梢に咲くかと待ち花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見るかたにと山めぐり、冬は冴えゆく時雨の雲の雪をさそひてやま廻り、廻り／＼て輪廻を離れぬ妄執の雲のちりつもつて山姥となるる鬼女が有様見るや／＼と峯にかけり、谷にひゞきて今迄爰にあるよと見

えしが、山又山を廻り／＼て何方も知れず失せにけりとぞ。一説に坂田公時は信濃國南安曇郡八坂村大字上籠の産だと云はれ、金時山、金時産湯の池など言ひ傳へてゐるから或は山又山をかけ廻る山姥のことなれば、四季を通し、或は足柄山、或は越後國上路山、或は信濃國上籠と、浮雲の如く、幼児公時を伴ひ、移動せしものか。

以上酒齋童子、坂田公時等の傳説の主人公を此世に誕生せしめた人間的親の存在明かならず、右の口碑は、例へば霞のやうに、掴むに觸れず、觸れざるに匂ひを籠むる、至つてとりとめのないものであるが、傳説を取纏めたまゝ、茲に記録す。

### 九、福來口と越冬の岩燕

西頸城郡青海町の裏山黒姫の山神、沼川姫命の舊蹟にして、青海町高畑地内より約一里山奥の黒姫山の麓にある洞窟にして、高約三間ばかり、幅二間餘り奥行數町に及ぶ。窟内或は濶きあり。或は狭きありて、岩壁より所々鐘乳が流れ出てゐる。岩窟最終の上部に即ち姫川連山谷川の末

流に於て蜂の巢と稱する所がある。地盤が恰も蜂の巢の如くになつてゐる。これは流水が岩石疊々の岩層下に浸透するに際し、石灰岩の風化せる岩層がこの處に流れ集りて、

水の浸透に依り、永年の間に自然的に、大は直径三間、小は一間位の漏斗形の穴となり、之れが聚團的に十數箇蜂窩狀を成したるを以て、此の名あるものにして谷川の流水がこの蜂の巢より岩層下に浸入し、この岩窟の遂道内を流下し、青海町東端を流るゝ田海川上流に落下するものにして、窟中暗昧燭を灯さざれば入るを得ずして、沼川姫の雨露を凌ぎ給へたる所なりとして、今なほ神代の遺物として、完全に保存されあるは全國中唯この福來にあるのみと云ひ傳へてゐる。

窟内は、夏涼しく、冬暖き所なれば、翅影一尺程の大蝠蝙蝠が奥深く飛翔してゐる。又窟内入口の岩壁には岩燕が數十羽營巢して四季を通して翔舞してゐる。寒冷の土地にして而かも多量の降雪ある所に於て、九月中旬南國へ渡り、翌四月古巢へ歸る習性ありと稱へらるゝ燕が、この北陸の

極寒地にありて越冬するは、是亦神代以來の不可思議の存在である。

以上述べたる蜂の巢の地形及越冬の岩燕の存在は、史蹟名勝天然記物として指定保存せらるべきであると認めらる

### 一〇、名産眞柏

石灰質岩盤により形成せる高山にのみ産すると云ふ不可思議の樹木にして、本邦に於ては、最初四國紀伊の石灰質岩石山に産したるものを採取盆栽に仕立たるを以て嚙矢とす。老木は數年ならずして採り盡されたるも、稚木は今猶ほ全國に紀州眞柏として普及せられ、一般に愛翫せられてゐる。紀州に於て採り盡されたる後、今より約三十年前に新潟縣西頸城郡青海町より南方約一里程隔りたる雲表に屹立せる黒姫山の頂上部斷崖絶壁の間に、白龍の這ふ如く點在せるを發見せられ、續いて其連山たる根知村宇小瀧の地域にある明星山にも發見する所となりたり。

これ等の山は何れも全山石灰を以て形成せる亭々千米以上の高山にして、こゝに産する眞柏は、本邦最優秀品にし

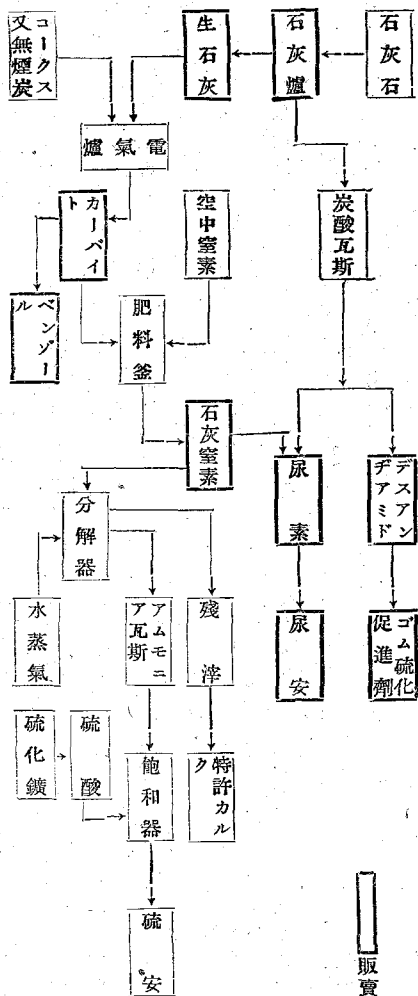
て、銘木としては、主に樹齡三百年以上と思はるゝものを採取して、盆栽に仕立るものにして、中にも二千數百年を経たる珍木を産出せしことありと云ふてゐる。

樹幹また大部分は枯木となり幾百年間春風秋雨の爲めに漂白して、堅きこと角の如く且つ他の樹木の如く腐朽することなく樹幹僅かに一條の褐色の生波を存するのみにして一見枯木に葉を生じたる如く奇妙な感を抱かしむ。樹幹よ

り／＼に振れたるあり、板の如く偏平なるあり、偏平にして且つ振れたるあり、雲形あり、曲幹あり、其他種々の自然的變態の珍形を成して盆栽中の雄なるものたり。葉色亦清爽な綠色に葉尖薄黃色を帶ぶ。紀州産は紺綠色、北海道産の更に黒味を帯びたるに比し觀賞上最優美なるものとして盆栽界に喧傳せられ、羨望おく能はざらしむるものあり。

一一、青海町と電氣化學工業

製 造 工 程 圖 解



販賣製品

新潟縣西頸城郡青海町に電氣化學工業株式會社（東京市  
麴町區有樂町一、三信ビル内）の青海工場がある。福岡縣  
大牟田市にも同様な工場があるが此青海工場は大正十年五  
月開設、青海町の背後に聳ゆる海拔千二百二十米の全山石  
灰岩より成る黒姫山より採掘する石灰石を主要原料とし、

姫川、黒部川の電力を併用して、カーバイト、石灰窒素、  
硫安、其他の製品を生産す。  
頸城なる黒姫山は國力  
無限大にぞ寶は盡きず  
會社製品工種を圖解すれば前圖の如し。

## 茨城縣の災害救済土木事業の執行と

### 其の前後の情況（四）

#### 瀧川 勸 則

#### 九、基本調査

災害深刻なるに鑑み救済土木事業を實施せむとするは第  
一に罹災民をして一時の生活を支へしむると同時に延いて  
は復興の氣運を醸成せしめ以つて數倍の効果を收めむとす  
る所が狙ひ所である、従つて一方に於て罹災民の志氣を沮

喪せしめず又他面救済事業を實施し得る基礎を作らねばな  
らぬ、交通の回復は恰も假死の状態に陥れる人間が心臓に  
刺戟を受けて呼吸と血液の循環とを回復し漸次正氣を取戻  
すと同様先第一の手段であらねばならぬ。又回復せる交通  
可能の範圍を縣民に知らしめ速に交通の効果を擧げしむる